

お飾りの妻だったのに、

冷徹な辺境伯を絶倫にしたところ
溺愛妻になりました

目次

お飾りの妻だったのに、冷徹な辺境伯を
絶倫にしたところ溺愛妻になりました

5

番外編 魔女の秘薬

253

お飾りの妻だったのに、
冷徹な辺境伯を絶倫にしたところ
溺愛妻になりました

◆プロローグ

「勃った……！」

まさか、アレが勃起するとは思ひもなかった。

隣ですやすやと気持ち良さそうに寝息を立てているのは、今日結婚式を挙げたばかりの妻だ。

だが、さっき「俺は君を愛することはない」と厳しい顔で言い放ったばかりの相手だ。

それなのに股間が盛り上がっている。

それもギンギンに勃っている。

冷徹で知られるバルシュ辺境伯たる自分が、年下の可愛らしい女性に欲情するとは嘆かわしい。

だが、初めての感覚に全身が喜びで打ち震えている。全身の血が歓喜して股間に集まり、打ち込む時を今か今かと待ちわびている。ありえないほどに硬くなり、貫くことを至上の命題とする杭となつて存在を主張している。

この寝室にいるのは、子づくりを期待する執事を納得させるための一刻だけと決めていた。同衾

したふりをして部屋を出ていくつもりだったが、いきり勃つ愚息はその意見を受け付けない。

隣には、辺境伯たる己がいるにもかかわらず「おやすみなさい」と挨拶をしてさっさと寝てしまった妻がいる。

彼女の髪から花のような甘い香りが漂ってきた。ぷつくりとした唇は可愛らしく、長いまつ毛は瞼に陰影を落としている。華奢でありながら、胸元にはけしからんほどくつきりとした谷間があり、白く盛り上がった乳房の形がはつきりと見え……あまりのギャップに股間が痛い。

ゴクリと喉を鳴らしてしまう。

——さ、触ってもいいかな。

いや、いかんだろう。なんといつても「愛することはない」と宣言した直後だ。

こんなことになるとは思わず「白い結婚」を言い渡したのは俺なのに、すぐに手を出すことは辺境伯たるプライドが許さない。

それに妻とはいえ、遠い王都から移動してきたばかりで結婚式を終え、もう寝ている女性だ。

さくらんぼ色の艶やかな髪が白いシーツの上に波打っている。瞼を閉じ長いまつ毛を伏せた寝顔はずいぶんと幼く見えるものの、二十歳を過ぎた妙齢の女性だ。

千人もの男を骨抜きにした魔性の女と聞いているが、可愛らしい口を半開きにして寝ている姿からは想像もできない。

いや、この谷間には顔を埋めてみたいと思うが、それにしては……
あの彼女に似ているのは気のせいだろうか。髪の色が違うことを除けば、整った顔や愛らしい唇、そしてこの俺に親しみを持って話しかけてくるところなど……心の奥にそっとしまった令嬢とそっくりだ。

いかん。余計に股間が痛くなってきた。

ルドヴィーク・バルシュ辺境伯である俺は、三十を目前に初めてもんもんとした思いで寝付けないくなる。

隣ですやすやす寝ている新妻を眺めつつも手を出せず、夜明けまで己の欲望と戦い続けた。そして翌朝、気持ち良さそうに目を開けた彼女に、悲痛な顔をしながら頭を下げて懇願する。

「——アリーチェ殿、頼みがあるのだが……」

プライドを捨てた俺は、これまでの生涯で初めて土下座をしたのだった。

◆第一章

《Side アリーチェ》

悲痛な一夜から遡ること一年前。

王都に出てきたばかりの私は、あるものを探すために路地裏に入っていた。

「アリーチェ様つ、どこですかあ——っ！」

侍女のシェナが私を捜す声が聞こえるけれど……ごめんなさい！ 今日一人で行動すると以前から決めていた。

「えっと……この道を曲がって、先に進むのよね……おかしいなあ」

それまで住んでいた田舎の領地と違い、王都の道は入り組んでいる。気がついた時には、子爵令嬢である私が足を踏み入れてはいけない、治安の悪い地域に立っていた。

——どうしよう、迷子になっちゃった……？

町娘のような服装をして、髪の色を桃色から黒色に染めている。

けれど所作などから、どうしても金持ちの娘と思われていた。帽子を被っていても、柔らかい髪がふわふわとはみ出している。

それでも探している店の方向へ進むと、道がだんだん狭くなっていく。戻ろうと思い振り返れば、前方を阻むように男たちに囲まれてしまった。

怪しげな男たちに目をつけられ、どこにも逃げるができず追い込まれてしまう。

「ひっ、ひっ。この白い肌、いいところのお嬢様かなあ」

「見ろよ、可愛らしい口をしているぜえ」

舌なめずりをした男たちは、今にも襲いかかろうとしている。

「や、やめてください……私、探している店があるので、道を開けてください」

目の前を塞がれ、壁を背にすると恐ろしさで声も小さくなる。男たちは下卑た笑いをしながら、

近寄ってきた。

両手を胸の前で握りしめ、震えを見せないようにするけれど、私が男たちを怖がっているのは明らかだった。

「なあ、俺たちがその店を教えてやるよ」

「い、いやっ！ 触らないで」

腕が伸ばされ肩に触れようとしたその時、通りかかった背の高い男の人が声をかけてくる。

「おい、その者たち、娘は嫌がっているぞ」

「なんだよ、お前は……っ、ひっ」

怪しげな男たちは背の高い方の顔を見て、一様に「ひっ」と身体を縮こまらせた。

まるで自分より強い獣に目をつけられた動物のように態度を変えるが、一人だけ抵抗する。

「こ、こいつは俺たちに道を聞いてきたんだ……あんたには関係ないだろうっ」

「そうなのか？」

低い声が頭の上から降ってくる。私が助けてほしいと顔を上げると、背の高い男性の顔には黒い霧がかかっていた。それも、ありえないほどの量の霧だ。

「えっ」

驚きすぎて声が詰まる。

もともと私には、人にまとわりつく黒い霧が見える。そして彼には、これまで見たこともないほど濃くて黒いもやもやがまとわりついていていた。

あまりにも凝縮しすぎて、顔の造形がわからないほどだ。

私が驚きの表情を見せた途端、狼藉者が手を伸ばしてくる。思わず「いやっ」とその手を払うと、背の高い方が私の身体を守るように間に入った。

「彼女はお前たちに、触れられたくないようだな」

低い声を発しながら、彼は男の肩を掴んだ。

すると怪しげな男たちは怯え、一瞬で動きを止める。同時に圧倒的な強者のオーラを浴び、蛇に睨まれたカエルのように震え上がった。

「わ、わかったよ……こいつにはなんにもしていねえから……見逃してくれよ」

両手を上げて降参のポーズをした男たちは、後ずさりする。それほどまでに、背の高い方は恐怖心を彼らに与えていた。

「お前たち。一つ聞くんが、——の魔女のことを知っているか？」

「魔女だって？ いや、知らねえな」

「そうか、では行くがいい。この場に留まるというなら、余罪を吐かせてやろう」

背の高い方が一睨みしただけで、男たちはサッとその場を去っていく。どうやら身の危険を察知する能力は高かったようだ。

怪しげな男たちが去ったのを見て、ホッとして胸に手を当てる。すると背の高い方は振り返って声をかけてきた。

「ここはあなたのような令嬢には危険な地域だから、早く戻りなさい」

近くで見ると、かなり大柄な男性だ。シンプルだが上質な生地を使った軍服姿で、高貴な地位と思われる。背筋を伸ばして立っている姿は威厳があり、見る者を圧倒した。

相変わらず顔は霽がかかっているため見えないが、助けてくれたお礼を伝えなければと、勇気を振り絞って微笑んだ。

「あの……助けてくださり、ありがとうございました」
すると彼は「うぐつ」と呻いた。

えっ、何かおかしいことをしちやったのかな……と見つめていると、男性はポツリと言葉を零す。

「私の顔が怖くないのか？」

「怖い？ ……いいえ、そんなことはありませんが」

怖いという前に顔が見えない。

私は不思議なことに、手で払うと黒い霽をなくすことができる。だから霽を取り払いたいけれど、いきなり初対面の人の顔を払うことはできない。

それにまだ目的の店を探せていないのにと思った途端、かくんと膝が折れてしまう。

「あっ」

すると彼の逞しい腕が私の胸に回り、危うく地面につく前に抱え込まれた。筋肉質な彼に抱き留められ、心臓がトクンと大きく高鳴る。

「大丈夫か？」

「は、はい……すみません、膝に力が入らなくて」

彼の低い声を耳元で聞くと、トクトクと鼓動がうるさいくらいに鳴り始める。身近に彼の体温を感じると、顔に血が上るようだ。

「すみません、今頃怖くなってきちゃったのかな」

すると男性は「大丈夫か？」と言い、私の様子を窺うように顔を覗き込む。

「まだこの地域は危ない。もし、私が怖くないのであれば……馬車まで送ろう」

「あ、はあ……ありがとうございます。でも、私は……って、きやあつ！」

彼は私が返事をした途端、膝裏に手を伸ばすとそのまま横抱きにした。思わず彼の首に手を回してしまう。

「あ、あの！ 自分で歩けますから」

「だが、膝に力が入らないのであればこの方が安全だ」

「で、でも……こんな、重いのでは」

「ははっ、羽根のように軽いから大丈夫だ」

男性は朗らかに笑いながら先を進んでいく。落ちてはいけなかつつかりと首を持ち、身体を寄せる。男性はがっしりとした体格で揺らぐことはない。

力強い腕に厚い胸板を感じ、私の心臓は早鐘のように鳴っている。

ど、どうしよう……こんなことになるなんて。

慣れない触れ合いに頬が熱くなる。恥ずかしいと思いつつも、不思議と抵抗感はない。顔は見えなくても、彼の心根が優しいことは伝わってきたからだ。

「それにしても、どうして君はあんな路地裏に一人でいたのだ？」

男性は歩きつつ疑問を口にする。

それはそうだろう、私のような令嬢が入り込んでいい場所ではない。

「あの……少年を好きな魔女がいると聞いて、やってきました」

「少年を好きな……魔女？」

「はい。その方の薬を飲めば、小さな男の子を好きになることができるって聞いて」

怪訝な声を出した彼は、「どうしてそんな薬を求めるのか？」と尋ねてくる。

どうしようかと迷ったものの、正直に胸の内を話すことにした。

「実は、私は今まで跡取り娘として育てられてきました。でも……この前、弟が生まれて。すると、もう私は跡を継がなくてもいいからって。これまで頑張ってきた勉強も、もういいと言われて」

「……そうか」

「それで、まだ小さな弟が憎くなっちゃいました。この子が生まれなければ、とか。そんなことを思ってしまう自分も嫌でたまらなくて。でも、魔女が少年を好きになる薬を売っていると聞きました」

大通りに出るまでの道すがら、彼は静かに話を聞いてくれる。

私はなぜか、顔も見えない相手に悩みを語り、自分の醜いところを晒していた。

「君は優しいんだな」

「そんなこと、ありません。弟を好きになりたくて」

「無理しなくてもいい。家族だからと言って、誰しもが無条件に好きになれるものでもないだろう。無理にしても……そうしたことは、どこかで反動が出てしまう」

低く落ち着いた声で『無理に好きにならなくてもいい』と言われると、心の中に刺さっていた棘が抜けていく。

まるで背中を撫でられたように、温もりが伝わってきた。

「無理しなくてもいい……」

「ああ、それに魔女を頼るのは良くない。あれはそんな、人を助けるような存在ではない」

「そうなのですか？」

「俺も魔女を探して調べているが、あいつらは人助けをするふりをして、騙すのが仕事だ。君も気をつけた方がいい」

そこまで言われると、もう魔女を探す気持ちにはなれなかった。それに、彼の言葉で私の心は軽くなっていた。

大通りに出ると、シエナが馬車の近くで待っているのが見える。彼女は私の姿を見つけると、息を切らして駆け寄ってきた。

「お嬢様！ ご無事でしたか？」

シエナはようやく私を見つけることができ、安堵の声を零した。

しかし私を抱き上げる男の顔を見た途端、表情を引きつらせる。どうやら何か勘違いしたのか、恐怖に染まっている。

「違うの！ こちらの方に、危ないところを助けていただいたの」

「お、お嬢様……」

「私を守ってくださいった、勇気のある方よ。そんな顔しないで」

シエナを安心させようと、私は彼の方を向いて柔らかな笑顔を見せた。

「供の者が失礼をしました、助けていただいたお礼を何かさせてください」

私の笑顔をすぐ傍で見た彼は息を呑む。男らしい喉仏がゴクリと動くと共に、低い声が発せられた。
「それは必要ない」

「でも……」

どうしよう。このまま彼の腕の中にいたい……と思っても、あつという間に馬車に近づいてしまう。
ギイ、と従者が扉を開けると彼は長い足を動かして中に入り、長イスに私を座らせた。

そのまますぐに外に出ようとしたため服を掴み、上目遣いに見上げる。

「あの……お、お名前を教えてください」

「……いや、これからは供とはぐれないように」

「では！ これで汗をお拭きください！」

私は馬車に置いていた鞆の中から、可愛らしい桃色のハンカチを取り出した。

「あつ、ご、ごめんなさい！ こんな色しかなくて」

ただでさえ子どもっぽいのに、こんな桃色のハンカチを渡してしまうなんて。恥ずかしさで目を伏せるけれど、彼は気にしない様子で受け取った。

「ありがとう、では、これだけいただいでいこう」

彼はハンカチを持つと大きな手で私の頭を撫でる。そして風のように馬車から降りた。

横抱きをされている間に少しかい黒い靄を払ったけれど、気晴らし程度のものだ。もつと時間をかけて、全ての靄を払いたかったのに。

でも、彼はもういない。

馬車に入ってきたシエナに聞いても、すぐに去っていったと言う。

「シエナ……私ったら、自分の名前も伝えられなかったわ」

「アリーチェ様、それで正解です。このように危険な目にあったことを、社交界で話されてしまうといけませんから」

シエナの言う通りだけれど、やはりきちんとお礼を伝えたい。顔はよく見えなかったけれど、正義感に溢れた素敵な男性だった。

「でも……あのように恐悪な顔をされていたので、てっきりお嬢様を攫おうとしているのかと思いました」

「まあ、そんなにも怖い顔をされていたの？ 私、靄がかかっていてわからなかったの」

「それはそれは……あの方はとても厳つい表情をされていて、本当に恐ろしくて」

「そうだったのね。優しい人だと思ったのに……黒い靄もかかっていたけど、胸の辺りは温かかったわ」

シエナは眉根を寄せると「お嬢様」とため息を吐いた。

彼はよほど恐ろしい顔をした人物のようで、ちよつぱり悲しくなる。

私には見えなかった彼の顔を、シエナに聞きながら頭の中で想像する。遅い身体つきで、厳しい表情の人だろうか。

シエナによると、顔つきは悪の集団の首領と言われても信じられるものだったという。

——けど、彼は、そんな人ではないわ。あんなにも優しくったもの……

私の心の内を聞いても否定することなく、温かい言葉をかけてくれた。もう、無理をしなくていいと言われたおかげで、私はようやく気持ちに区切りをつけることができていた。

王都の屋敷へ無事に帰ることができた私は、これまでを反省して弟のために肌着を用意することにした。

ずっと姉らしいことをしていないから、名前を刺繍しようと針を手にとるけれど。

「素敵な人だったなあ……」

つい、ため息を吐いてしまう。お札を言いたいのに、助けてくれたあの方の名前すらわからない。落ち込んでばかりいてはいけないと、王立図書館に行き調べると、彼と思しき人物に辿り着いた。

肩章に描かれていた竜の紋と屈強な体つき、特徴的な軍服と一つにくられた長い黒髪から、ルドヴィーク・バルシュ辺境伯、その人であると思われた。

——バルシュ辺境伯閣下……

彼はいつ攻め入ってくるかわからない隣国に武力で睨みを利かせ、このシャリアード王国を守つ

ている重要な人物だ。さらに国境には魔物の湧く森があり、常に緊張を強いられている。

バルシュ辺境伯の率いる騎士団は、この王国でも最強と謳われていた。

現バルシュ辺境伯は父親が早く亡くなったため、幼少期に爵位を継いでいる。そのため若い頃から戦いに身を置き、見る人を震わせるほど恐ろしい人物だという。

濡れ羽色の髪に眼光鋭い黒眼で、容姿端麗であるが故に恐怖を感じさせると専らの噂だった。

部下もつけず、単身で王都を歩いているはずはない身分の人。

けれど一睨みするだけで悪漢を従わせる、あれだけの強さを持つのであれば護衛など必要ないのだろう。

名前はかろうじてわかったけれど、そのことで一層落ち込んでしまう。

——雲の上の人だったんだ……

同じ貴族とはいえ子爵令嬢では、身分が釣り合わない。

それに辺境伯閣下は、舞踏会といった賑やかな場所は好まないという噂だった。もう一度会いたいと思っても、機会もない。

お礼状を書いたけれど、間違っていた場合は失礼になるため出せなかった。何もできずにいることで、私の胸の中にはバルシュ辺境伯への淡い想いが積み重なっていくのだった。



部屋に置いたソファ―に座りながら、私は開いていた本を膝の上に置いた。目は文字を追っているけれど、ため息しか出てこない。

王都にいれば、いつかまた会えるかとも思っていた。けれど彼は普段は辺境にいて、王家に代わって敵の侵略を防いでいるという。

そんな方とお知り合いになるなんて、ただの子爵令嬢には無理なこと。いつも辿り着く答えに、つい深く息を吐いてしまう。

するとコンコン、と扉を叩く音がする。私は読んでいた本に葉を挟むと、ぱたんと閉じて返事をした。

「はい、どなた？」

「アリーチェ、私よ。いいかしら」

部屋に入ってきたのは、いつも通り朝帰りをしたアミフェ姉さまだ。

燃えるように赤くうねる髪に黒翡翠の瞳、目尻がちよっぴり上がった美人で自慢の姉。美しすぎてモテモテで……ちよつと夜遊びが激しいけれど、とても素敵な女性だ。

「もう、夕べも出かけていたら疲れちゃって」

「姉さま、昨夜も寝ていないの？」

「そうなの、閣下が離してくれなかったのよ」

ふわあ、とあくびをした姉さまは、私の座るソファ―の隣に座った。たわわに実るむっちりとした胸の谷間がくつきりと見える服を着て、まだ寝足りないといった顔をしている。

「アリーチェ、いつもお願いできる？」

「もうっ、仕方がないなあ」

手を伸ばして姉さまの腰に触れると、もわもわと黒い煙のような霧が立ち上る。私にしか見えないうそれを、手を左右に振って散らす。

十代の後半を過ぎた頃から、私には不思議な力が現れた。人にまとりつく黒い霞がかった霧が見え、埃を払うように手を振ると、それを綺麗になくすことができる。

この世界にも魔法はあるけれど、幼い頃から使えるのが普通だ。私みたいに成長してから現れるのもおかしいし、それに、ただ霧を払うだけの力だからと、お父様から他言しないように言われていた。

払われた人は疲れがなくなるのか、スッキリとした顔を見せてくれる。やりすぎると私の方が疲れて眠くなってしまうから、普段はほどほどにしている。

でも家族である姉さまから頼まれると、断ることはできない。

「はい、終わりました」

「はあーっ、生き返るっ！ アリーチェ、いつもありがとうっ」

姉さまは腕を伸ばすと私の後頭部を抱え込むようにして抱きしめた。すると豊かな胸が顔面にき

て、押し潰される。

「わぶつ、ね、姉さま！ く、くるし……」

「もうつ、本当にアリーチェは可愛いんだからっ！」

「そ、そんなこと……ありまへっ」

ちゃんと話をしたいのに、胸を押しつけるようにぐりぐりとされ、頬に柔肌が触れる。

「もうつ、アリーチェはいつもそう言つて。この白くて柔らかな肌にくりつとした華色の瞳、ぽつてりとした唇で、もう誰が見ても本当に可愛いのに！」

「姉さま。でも姉さまだけです、そんなことを言うのは」

「本当に貴族の男たちは見る目がないんだからっ！」

そう言うけれど、むにゅっと胸を押しつけてくる姉さまの方がよほど美人だ。

私は背が低くて童顔だから、男の人からはそうした対象には見られない。それは別に構わないのだけれど……

目の前にある谷間を見ると、姉さまの白い肌に誰かが吸い付いたような痕があった。

「あれ、姉さま。こんなところが赤くなっていますよ」

「え、やだっ、ほんと！ もうつ、見えるところにはつけないでっ、いつも言ってるのに」

「……またですか？」

「そうなのよ！ 昨夜は盛り上がったから、私も油断しちゃったわ」

姉さまはようやく胸を離すと、あははと言いながら頭をかく。あっけらかんとしている姉のこと

が大好きだけど、実は母親が違う。

アミフェ姉さまとはいわゆる異母姉妹だ。

姉さまの母親は南国から来た踊り子だった。私たちの父親であるベルカ子爵が結婚する前に、閨教育を兼ねて身体を重ねた時に授かった子どもだ。

踊り子だった母親は娘を産むと、赤子を置いてすぐに旅芸人のところへ戻ってしまった。父は婚約者であった母と相談し、その子も娘として育てることに決めた。

そしてその後、結婚した二人から私が生まれている。母親は違っても、私たちは姉妹として仲良く育った。

姉さまは年ごろになると身体つきが変わっていく。踊り子だった母親も見事な身体つきをしていたらしく、それを受け継いだのか豊満な胸にくびれた腰、張りのある臀部と男性を魅了する身体に育った。

それに比べ私の背は低く、顔は母親に似て少し幼く見える。

胸の大きさだけは姉さまにも劣らないけど、妖艶な美女と言われる姉に対して私はどう見てもちんちくりんだ。

さらに人込みの中に行くと、黒い靄が目についてしまったため、自ずと人前に姿を出すことを控えるようになっていた。

おおらかな姉さまは、未婚であるにもかかわらず性に奔放な性格だ。避妊薬を飲めば大丈夫と言つて、男性からの誘いを断ることはない。

ここシャリアード王国は開放的なお国柄のため、子爵令嬢といっても正妻の娘ではないから大目に見られている。

そうしているうちに、姉さまは男性を手玉にとる『魅惑の子爵令嬢』と呼ばれるようになる。けれど本人は気にすることはなく、武勇伝とばかりに胸を張っていた。私にとって、誰が何を言っても彼女はキラキラと輝く誇らしい姉だ。

さらにこの頃、姉さまの噂話に尾ひれがついて、『童貞千人切りの美女』と言われている。本当かしらと聞いたところ、本人は「どうかしらね？」と微笑んでいた。

そして先日姉さまはある男性から観劇に誘われていた。

「アリーチェ、たまには一緒に劇を見に行きましょうよ。良い席がとれたんですって」

「でも……誘われたのは姉さまです」

注目を浴びまくっている姉さまの後ろに、妹の私がいたら目立ってしまう。ただでさえ人混みは苦手なのに、視線を浴びてしまうとうなるのか、自信がない。

「そうね……私の妹とわかると、危ないかしら」

「姉さま、どう危ないのですか？」

「突然、声をかけられるのよ。僕の筆おろしをお願いします、とか」

「筆おろし？」

また初めて聞く言葉だ。姉さまは時折、私が知らないことを話す。

「そうなのよ……でも、アリーチェだと事故になっちゃうから、危ないわよね」

筆おろしが事故になるって、どんな筆だろう。私の頭の中にははてたくさん浮かんでしまう。いつもなら、すぐに意味を聞くのだけれど……姉さまは手をポンと打つと、いい事を思いついたとばかりに顔を輝かせた。

「私の侍女のふりをするのはどうかしら？」

「侍女ですか？」

「そうよ、地味なドレスにして髪も詰めておけば、誰もあなたを妹だと見抜けないわ」

姉さまは男性と出かける時、どうせ泊まりになるからと侍女を伴うことはない。子爵令嬢としてどうかと思うけれど、常態化しているからか、もはや誰も注意しなかった。

「そこまでして劇を見に行くのも……それに、姉さまのデートを邪魔するようで気が引けます」

「あら、今回の題目はあなたの好きなお話が元なのよ」

「えっ！」

なんと、私が夢中になって追いかけていたお話が上演されるという。人気がありすぎて席が取れないと聞いたけど、姉さまの気持ちを抑えたい紳士がボックス席を手に入れたようだ。

「二階席だから、他の人の視線も気にならなくていいわよ」

「それなら……ちよっと、行きたいかも」

「あなたに侍女のふりをさせるのは、申し訳ないけど」

綺麗な眉尻をへにやりと下げた姉さま。そんなお顔も美しい。

「その方が私も落ち着いて観劇できるから、大丈夫です！」

目立つことは苦手だけれど、劇は見たい。それを叶えることができるなら、と私は侍女に服を借りて変装をする。姉さまはいつものごとく、薔薇の花が咲き誇ったかのように美しい、深紅のドレスを選んでいた。

「行くわよ」

「はいっ、姉さま……あ、いえ、アミフェ様」

一緒になって子爵家の馬車に乗り劇場へ向かう。お相手の方は入り口で待っているとの話だった。そう、お相手の方が……一人、と思っていたけれど。

劇場に到着すると、私たちを待ち構えていたのは一人ではなかった。

二人の紳士がタキシード姿で立っている。そして姉さまの姿を見るとすぐに、エスコートをするために近づいてきた。

馬車を降りたところで、二人が鉢合わせをしてしまったのだ。

「君、私が今夜誘ったのだから？」

「いえ、約束したのは僕の方が先でした」

初老と思しき男性と、どう見ても姉さまより年下に見える男性がバチバチと視線を戦わせている。どちらも多分、姉さまにはタイプの男性に違いない。

「アミフェ様、これはどういった状況なのでしょう？」

「まいったわ、お二人と約束していたみたい」

まいったではない。

二人は今にも決闘しかねない雰囲気になっているのに、姉さまは呑気なものだ。どうしたものかと思っていると、姉さまは二人に近寄りその中央に立った。

「ねえ、私の腕は二本ありますのよ。それぞれエスコートしてくださいませんか？」

堂々と言い放つ姉さまにあつげにとられたのは私だけでない。騒然として成り行きを見ていた周囲の人たちも、度肝を抜かれたようだった。

紳士たちもはじめは目を丸くしたけれど、姉さまの両隣に立つとそれぞれ片腕を出した。

こんな姿が許されるのも、アミフェ姉さまだからだ。両手に紳士を従わせ、中央の大階段を堂々と上っていく。

私はその後ろをちよこちよこ歩いていくのみ。

結局、二つあるボックス席の一つに私だけが座り、アミフェ姉さまたちは違うボックス席に行ってしまった。

劇をしつかりと観たのは私だけだった。……と思う。

二人の紳士に挟まれた姉さまは、ずっと話しかけられていたのか、お話が頭に入らなかったという。劇が終わったところで合流すると、姉さまは頬をうつすらと赤く染めていた。心なしか髪も乱れている。

「アリーチェ、あなたは先に帰れるかしら？ 私はこの方たちと、もう少しお話があるの」

「ええ、大丈夫です。そうなるかと思っていました」

きつと紳士たちと夜通し話をされるのだろう。私は劇の余韻に浸りながら我が家の馬車に乗り込

んで帰宅する。

そうして翌日、朝帰りをした姉さまはやはり黒い靄もやを腰の辺りにまとわせていた。

「姉さま、今日はいつもとより濃いですね」

「……そうね、二人同時に相手したから、ちよつと激しかったわ」

手をかざしてパンパンと払い終えようと、いつも通り姉さまはスツキリとした顔を見せる。そしておもむろに話し始めた。

「アリーチェ、そういえばお父様がもうすぐ王都へ来られるわね」

「ええ、大事な話があるらしいけれど……何かしら」

普段は領地にいるお父様が来ると聞き、王都にあるベルカ子爵カレンベルグの屋敷に滞在する私たちは顔を見合わせた。

姉さまは「またお説教かしら」と頭をかきながら遠くを見る。

けれどお父様が持ってきたのは、適齡期の娘には当たり前すぎる話だった。



「はあつ？ お父様、この私が結婚ですか？」

「アミフエ、何をそう驚くことがある。お前もアリーチェも成人したからには、こうした話の一つや二つあってもおかしくはないだろう」

旅装を解といたお父様は早速私たちを部屋に呼び寄せると、一通の証書を差し出した。そこには『ベルカ子爵令嬢と婚姻を結びたい』と記されている。いわゆる政略結婚の申し込みだ。

そして、そこに書かれた差出人に驚きを隠せない。名前を聞いた途端、私の心臓がドクンと大きく鼓動する。

——ルドヴィーク・バルシュ辺境伯。

あの時助けてくれた人だ。

「でもお父様。バルシュ辺境伯といえば、全く女性を寄せ付けないという話です。男色の噂うわさもあるような方から、本当に申し込まれたのですか？」

「ああ、だから何かの間違まちがいかと思つて使者に聞いてみたが、やはりお前を娶めとりたいようだ」

「まさか！」

姉さまは驚きのあまり口をあぐりと開いた。

美人と名高い姉を求める男性は多いが、正式な婚姻となると話が変わる。男性と浮名を流しまくっている令嬢を娶めとるなんて、相当の覚悟がいるはずだ。

「アミフエをどこかで見かけたのかもしれないな」

「会つてお話ししたこともないのに。求婚してくるなんて非常識だわ」

納得がいかないとばかりに怒り出した姉さまが、お父様をなじるように詰め寄った。

「お父様、私は結婚などしません。以前からそう伝えているではありませんか」

「わかつておる。私も噂うわさのあるお前を娶めとりたいと、酔狂すいきやうなことを言う御仁ごじんがおるとは思つていな

かった」

お父様も姉さまには手を焼いているのか、既にいろいろと諦めている。ベルカ子爵位は生まれたばかりの幼い弟に継がせればいいと、私たちを自由にさせていた。

それなのに、王族に次ぐ地位といってもおかしくない辺境伯からの申し込みに、頭を抱えている。「これがアミフエではなく、アリーチェであればなあ……お前であれば、辺境伯夫人として立派にやっっていけるのだが」

「そうよね、私なんかよりもアリーチェの方が喜ばれるわよ」

お父様はジトツとした目で姉さまを見た。母親は違えど姉妹のはずなのに、ここまで性格も容姿も違う娘に育つとは思ってもいなかった、という顔をしている。

姉さまは姉さまで、父親から何を言われても動じない。

確かに、私は一年ほど前までは子爵領にいて、跡継ぎ娘として教育されていた。将来は婿をとってベルカ子爵領に骨を埋めるつもりでいたから、必死になって学んでいた。

でも、それは年の離れた弟の誕生で急変した。

もう跡を継ぐ立場からは解放されて、王都に出てきた私は読書三昧とのんびり過ごしているけれど……

戸惑う二人を見ていた私は、覚悟を決めて拳をキュツと握りしめる。

——彼に会えるかもしれない。

それに大好きな姉さまと、困っているお父様を助けるためだ。

「お父様！ 私がバルシュ辺境伯閣下のところへお嫁に行きます！」

「アリーチェ？」

驚く二人を横目に証書を手に持って広げると、よく読むようにと指し示す。

「ここをよく見てください。ベルカ子爵令嬢と書いてあるだけで、お姉さまの名前ではありません。それなら私でも大丈夫です」

「だが……いや、確かにそうだな」

お父様は考え込むように顎に手を置くと、二人の娘を見た。どちらも十八歳を超え成人している。私は社交界に顔を出していないが、立派に育った娘の一人だ。

「アリーチェはそれでもいいの？ バルシュ辺境伯と言えば、冷徹と噂されている方なのよ」

「姉さま、それならなおのこと私の方が適任です。この手があれば、疲れを癒すことができるので重宝されると思います」

「それはそうかもしれないけど。でも……」

「大丈夫です。私、辺境伯閣下を一度お見かけしていますが、とても素敵な方でした！ あの方のところに嫁へ行けるのでしたら、嬉しいですよ」

「まあ、そうなの？ でもバルシュ辺境伯の領地は遠いから、あなたがいなくなると寂しくなるわ」姉さまが私をぎゅっと抱きしめると、頬に豊満な胸が当たった。

「く、苦しいです……お、お姉さま」

むぐぐ、と唸りながらも姉さまの惜しみない愛情に嬉しくなる。領地において弟につきっきりの母

親に代わって、王都に出てきた私の世話をしてくれた。

いろいろと噂はあるが、私にとっては大切な家族だ。

「アリーチェさえよければ、お前の方が辺境伯夫人として心配は少ない。アミフェを希望したら、遠慮しないで帰ってくればいい。それはそれで、考えるから」

「お父様」

眉根を寄せつつも、優しいお父様は仕方がないとばかりに証書の返事を書き始める。子爵の身分で辺境伯からの求婚をはねつけることなどできないが、せめて娘には幸せになつてほしいのだろう。「だが、どうして我が家なのだろうな……」

ぼそりと呟いたお父様は、はあ、とため息を吐きながら筆を進める。返答には私の名前を記し、使者に丁寧に渡された。

こうして私は、バルシュ辺境伯……ルドヴィーク様の元へ嫁ぐことが決まった。

結婚準備のための婚約期間なども設けられず、身一つですぐに来てほしいと連絡が届く。お父様にはもう一度確認されたが、それでも私の意思は変わらない。

だって私の胸の中には、ルドヴィーク様が既に住み着いているから。

結婚が決まり、私は彼を思い返す度にふわふわとして何も手につかなくなる。

そんな様子を見たアミフェ姉さまが声をかけてきた。

「アリーチェ、あなた、本当に恋をしているのね」

恋愛に関して言えば、姉さまは玄人だった。

「いい、アリーチェ。恋は駆け引きなのよ、女にとって戦いなもの！ あなたには私の経験からまとめた『閨の格言』を教えてあげる」

「姉さま……！」

それからは結婚への備えと称し、姉さまによる閨特訓が始まった。格言を教わり暗唱する。私にとって、それは刺激的で目の開かれるものばかりだった。



慌ただしくも結婚の準備を終え、荷物を整える。アミフェ姉さまと別れる寂しさはあったけれど、なんとシエナが侍女としてついてきてくれることになった。

「シエナ、本当にいいの？ 辺境伯領は遠いところなのよ」

「大丈夫です！ お嬢様を一人で行かせることはできません！」

ありがたい申し出にホッとする。そうしてシエナと一緒に、馬車に乗りバルシュ辺境伯領へ向かっていく。

堅牢な城壁に囲まれた街に入ると、人々のざわめきが聞こえてきた。

バルシュ辺境伯領のお膝元である街は活気ついている。窓から外の様子を見ているだけで、うきうきと心が弾む。これから、ここが私の住む街になる。

私は乗りっぱなしで痛みを感じる腰とお尻をゆっくりと撫でた。すると黒い靄が消えスツと身体が軽くなる。不思議な力のおかげで、弱音を吐くことなく長い旅路を終えることができた。

辺境伯の住んでいる城の周りには川が流れ、城内に行くには石で造られた橋を渡る必要がある。頑強な砦の中にある城の正門でガタン、と音を立てて馬車が止まると、扉の向こう側には踏み台が用意されていた。

服装に乱れがないかを確認して、扉が開くのを待つ。窓からは尖塔がそびえる壮大な城が見える。ここにルドヴィーク様がいると思うと、胸がバクバクしてうるさいくらいだ。

カチャリ、と鍵が外され扉が開いていく。新鮮で冷たい空気を吸い込むと同時に、一歩足を踏み出した。

けれど……

「え？」

どう見ても壊れかかった屋敷が目に入る。到着した先で案内されたのはルドヴィーク様の住む城ではなく、離れにある別宅だった。

馬車を降りると周囲には誰もおらず、御者が「こちらです」と案内する。

目の前にあるこぢんまりとした屋敷は、長いこと使われていなかったのか埃が舞っている。

破れたままの窓に、蝶番の外れたドア。灯りのない屋敷の中は、幽霊が出てきてもおかしくないほど暗い。

馬車に載せてあった荷物が玄関に運び込まれると、シエナと二人で残されてしまった。どうやら、

屋敷にはメイドも配置されていないようだ。

「シエナ……ここが本当に私の新しい住まいなのかしら」

ギイギイと屋敷の奥からは恐ろしい音が聞こえてくる。二人きりでどうしたものかと眺めていると、下男らしき男が庭から近づいてきた。

「はあ、あんたたち、お館様の新しい嫁さん候補か？」

「嫁さん候補って……！ この方はベルカ子爵令嬢なのよ、それなのにこんな屋敷って……あなた、何か知っているの？」

「何かって……おらあ嫁さん候補が来たら、案内するだけだ」

下男は屋敷の中に入ると、荷物を持って階段を上っていく。屋敷の中の暗さに馴染んでくると、なんとか物の在りかは見えてくる。

「シエナ、私なら平気よ。何かの間違いかもしれないけど、とりあえず部屋に行ってみましょう」

「わかりました……お嬢様、後でしっかりと確認しますので、気を確かに持ってくださいね」

「大丈夫よ、このくらいのお屋敷なら領地にもたくさんあったわ」

てっきりバルシュ城に案内されると思っていたけれど、どうやらそうではないらしい。本当にここで暮らすことになるのかと不安が胸をよぎる。

でも、間違いであったも案内されたのだからと気持ちを切り替え、シエナと一緒に屋敷に入っていく。

けれど、私が想像していたよりもはるかに状態は悪く、春なのに隙間風が入って冬のように寒い。

「ねえ、シエナ……私、本当にバルシュ辺境伯閣下と結婚するのかしら」

「そうですね……これは、何かの間違いだと思いたいのですが」

すると屋敷で呆然としている私のところへ挨拶に来たのは、デイモンドという名の筆頭執事の方だった。

「お初にお目にかかります。私が……っ！」

彼は私の顔を見るなり、ピキリと固まった。「まさか……こんな可憐な方が……」と呟いたかと思うと、すぐに襟を正してお辞儀をする。

「申し訳ありません、このようなお屋敷でお迎えすることをお許しください。これも主人であるルドヴィーク様のご命令でして……その、辺境の地を体感していただきたいとの配慮もあり……」

「デイモンドさん、私のことでしたら大丈夫です。きっとこのお屋敷も掃除をすれば、住み心地が良くなると思います！」

につこりと笑った私を見て、デイモンドさんはどこか複雑な顔をしている。けれど、どうやら姉ではないことを不審に思っていないようだ。

——良かったあ、アミフェ姉さまではないと言われたら、どうしようかと思ったわ……

父親は同じなのに、私と姉さまはあまり似ていない。胸がちよつぱり大きいところは似ているけど、それでも姉さまよりは小さかった。

だけど筆頭執事に認められたから、私でも大丈夫だろう。とにかくベルカ子爵令嬢であれば良かったようだ。

ホツとしつつも荷物を広げようとすると、彼から結婚式のことを伝えられる。

「簡易ではありますが、式は十日過ぎた頃に行います。必要なものがございましたら、なんなりとお申し付けください」

「まあ、そんなにも早く式を挙げるのですね……」

驚きを隠せないけれど、ここまで来たからには覚悟を決める。拳をギュッと握りしめ、「わかりました」と返事をする。デイモンドさんはホツとしたのか頬を緩めた。

「それで、ルドヴィーク様にお会いしてご挨拶をしたいのだけど、どちらにいらっしゃるのかしら」
たちまちデイモンドさんは眉根を寄せ、少し困ったような顔をする。

「ご挨拶についてはルドヴィーク様に確認してからお呼びいたします。しばらくお待ちください」
「……そうなの」

結婚の前に挨拶もないなんて——つい耳を疑ってしまう。けれど彼はにこやかに返答した。

「それではよろしく願います。アリーチェ様の手腕には私をはじめ、皆期待をしておりますので——」

再び丁寧にお辞儀をされて頼まれるけれど、手腕つてどういうことだろう。

その疑問は明かされることなく、そしてルドヴィーク様に会うこともなく、私は結婚式までの日々を過ごすことになった。



「えっ、明日の午後に結婚式？」

「はい、その通りでございます」

時折、顔を出してくれている執事のデイモンドさんが来て、結婚式の説明をしてくれた。どうやら結婚するのは本当のことらしい。

顔も見せてくれないのは、忙しいからだと言えられるけれど……

「ルドヴィーク様は本当に私が相手でもいいのでしょうか」

「はい、それはもう……楽しみにされておられますよ」

楽しみだといいつつ、口の端をヒクツと上げているところを見ると、ルドヴィーク様は納得していないのだろう。

貴族同士の結婚は心が伴わないことも多いけれど、私としては仲の良い夫婦関係を築きたかった。疲れが溜まっているなら、早くこの手で霧を払いたい。はじめは私に愛情を持てなくても、根気良く接していけば、いつかは夫婦として愛情を持てる関係になれる……かもしれない。

「そうでしたか。では、明日を楽しみにしています」

あの時助けていただいたから、早く恩を返したかった。そんな私を見て、デイモンドさんは嬉しそうに目尻を下げると同時に、しみじみと呟いた。

「しかし……アリーチェ様は誠に働き者でございますな」

頭巾を被り、袖のあるエプロンを着けて口元を覆う布を巻いている。この埃だらけの屋敷を綺麗にするために、シェナと二人で一日中掃除をしていた。

下男にも手伝ってもらい、大きな家具の天井や照明器具までも拭き終えた今は、見違えるほど綺麗になっている。これならば領主であるルドヴィーク様を迎えても大丈夫だろう。

「いえ、領地にいた頃はメイドとも気安くて、よく手伝っていました。王都ではシェナから止められていましたけど、どちらかといえば身体を動かしている方が好きなんです」

「ほう、それはそれは」

彼は目を細めてにつこりと笑う。目尻の皺が領地にいる爺やとそっくりで親近感が湧くから、私は何もなくてもここにこしてしまおう。

「結婚式の準備は特にありませんが……ドレスはお持ちになってきたとか」

「はい、こちらでは結婚式では白いドレスと聞いていたので、急いで仕立て直したものがありません」

「……ここ、バルシュ領のことまで調べてくださるとは」

「もちろんです、私にとって第二の故郷になるのですから」

デイモンドさんは恥を指で押さえると「なんと、ありがたいことか」と涙ぐんでいる。そのうち「なのに、坊ちゃんときたら、契約など持ち出して……」とブツブツと呟き出す。

「デイモンドさん、どうされましたか？」

「あ、いえ。こちらのことです。明日と突然ですが、よろしいですか？」

「ええ、衣装を着てお待ちしていますね」

「はい、迎えに私の息子のゼフィールを寄越しますので、その者と共に来てください」
につこりと微笑んだデイモンドさんは、私にはそれ以上何も伝えることなく屋敷を去っていった。



次の日は快晴、朝から急いで身体を磨き、衣装を整え化粧をする。質素とはいっても結婚式だから、綺麗な姿でいたい。デイモンドさんの話では、結婚式は簡易だけれど半年後に行う披露宴は盛大にするらしい。

その時までどうかお残りください、なんて含みのある言い方をされたけれど……

「会場はこちらです」

迎えに来てくれたゼフィールさんは、朗らかなお父さんと違いとても生真面目そうな人だった。銀色の長い髪を後ろで縛り、眼鏡をかけて笑顔もなく、いかにも有能な側近といった雰囲気を出している。普段はルドヴィーク様の執務を補佐しているようだ。

ゆつくりと歩く彼の後について、初めて礼拝堂に入っていく。白く小さな建物は、軍事演習もするという広大な庭の隅に建てられていた。

尖塔の先端には鐘があり、城内に時刻を知らせている。今日は式典のため開始時刻にはカラン、コロンと盛大に鳴っていた。結婚を祝福しているようで嬉しくなる。

「では、お入りください」

ゼフィールさんは入り口の扉を開くと足を止め、私はそのまま入場していく。といっても、ルドヴィーク様の両親は既にいないため、立ち会うのは数人の使用人頭だけのよう。

本当は私の家族も招きたかったけれど、外の人を呼ぶ必要はないとルドヴィーク様から止められていた。

とにかく今日、私はようやく彼と再会できる。それと思うだけで緊張して、手には汗をかいていた。「本当にいるのかな……」

扉が開かれる前、つい呟いてしまったけれどそれは杞憂だった。

——いた！ ルドヴィーク様！

彼は漆黒の長い髪を下ろし、白い式典用の騎士服を着て祭壇の前に立っている。

今日も金色の肩章には竜の紋が煌めき、金糸の飾り帯が二本も垂れていた。濃い青色のサッシュがかけられ、白い手袋をしている。

鍛えられた筋肉質な身体の魅力余すところなく見せつけるような正装だ。あまりにも素敵な姿を目前にすると、それだけで私の足は震えてしまう。

でも……相変わらず顔の周囲には恐ろしいほどの黒い靄がかかっている。よく見ると腰の辺りも黒くなっていた。

あんなにも靄がかかって、身体は大丈夫なのかな……

心配になるけれど、今の私は花嫁だ。急に新郎の身体を払うわけにはいかない。

私は白い花の刺繍のついたドレスを着て、薄いベールを被っている。顔が見えるようではつきりと見えないベールは、辺境でしか採れない糸を使っている。

緊張で足が震えながらも、新郎の隣になんとか進んでいく。質素で簡素だと聞いていた式は、本当にその通りだった。

音楽も何もなく司式が行われ、誓い合うとすぐに結婚宣誓書に署名をする。キスもないまま、一生に一度の式典があつという間に終わり、私はバルシュ辺境伯夫人となった。

結婚式後は城にいる者を集め、庭園で祝いの席がもたれている。けれどルドヴィーク様は乾杯の音頭をとっただけで、私の手をとると立ち上がった。

ベールはつけたままだから、まだ正面から顔を見られていない。ようやく手袋越しに手を触れられ、私の心臓はトクリと跳ねる。

「皆の者、後は楽しんでくれ」

低い声が明々と庭に響き渡ると、ルドヴィーク様は私の手を引いて会場を後にした。白いドレスが汚れないように気をつけながら、引かれるままに進んでいく。

「あの……今夜はどちらの部屋に？」

慣れない場所を進んでいくけれど、どこに向かっているのか見当もつかない。私の支度は全て離れにあるけれど……と思っていると、ルドヴィーク様はそこで足を止めてこちらを見下ろした。

「今夜は……離れの方が面倒が少ないな。よし、別宅に行くぞ」

「えっ、あ、っはい」

慣れた屋敷に行くことになりホッとするけれど……ルドヴィーク様はあそこに泊まるつもりなのだろうか？ バルシュ辺境伯たるお方がお泊まりになってもいい場所だろうか、と思うけれど手を引かれてしまい、どうすることもできない。

長い足に追いつくために駆け足気味で進んでいく。冷たい春の風が吹く中、そんなことにはお構いなく突き進んでいく。靄さえないければ、表情を見ることがするのに……それさえも叶わない。

ようやく屋敷に辿り着くと、ルドヴィーク様は建物を見上げてチツと舌打ちをした。

「これほどまでに荒れていたのか」

「ルドヴィーク様？」

どうやら彼は、離れの屋敷がここまで廃れていたとは知らなかったのか、申し訳なさそうに下を向いた。

「すまない、こんな屋敷を俺はあてがっていたのか」

「大丈夫です、私とシェナで掃除をしたところ、随分と過ごしやすくなりました。流石に外壁までは手が回りませんでした、中は綺麗ですよ」

「君が……掃除を？」

「はい」

素直に答えると、どこか疑っている様子だ。でも、とにかく屋敷の中に入ろうと手を引かれる。

「確かに、中はまともなようだな」

外と比べると、屋敷の中は修理もできている。

「そう言っていたけると、嬉しいです」

「君は……」

ルドヴィーク様はためらいながらも、私の手を引いていく。するとシェナが出迎えてくれた。「アリーチェ様、お待ちしていました。一旦お着替えをしますので、こちらへどうぞ」いつものお仕着せを着たシェナが案内しようとすると、ルドヴィーク様が足を止める。

「君は……どこかで見えたような」

とシェナに目を留めて呟いた。確かに、王都で助けてもらった際に会っている。けれど、シェナはその時のことを思い出したのか、「ひっ」と言い固まった。

「あの、ルドヴィーク様は先に寝室へ行ってください。私もすぐにまいりますから」

「あ、ああ」

彼も怖がられるのに慣れているのか、すぐに階段を上^{のぼ}っていく。私はルドヴィーク様と別れて一旦私室に戻ると、ドレスを脱いで薄い夜着に着替えさせられた。

「シェナ、こんなにも薄いものを着ないといけないの？」

「はい、初夜の花嫁はこうしたものを着て、旦那様を夢中にさせるのです」

「でも、恥ずかしいわ」

白っぽくて薄い生地でできたそれは、私の胸の谷間をくつきりと浮かび上がらせている。こんなにもはしたないものを着て、軽蔑されないだろうか。でも白いガウンを羽織ると夜着は隠れ、簡易なワンピースを着ているような姿になった。

これであれば大丈夫と、私は主寝室に通じる扉を開けて中に入る。この部屋も掃除をしておいてよかった。

すると先に部屋にいたルドヴィーク様は正装を解^とき、扉に鍵をかけて部屋の中や窓の外を窺^{うかが}っている。

「……デイモンドめ、見張りを立てているな」

「？ どうされましたか？」

振り向いた彼は私の顔を真正面から見つめた。そしてガウン姿を目にすると、手にしていた書類をバサバサッと落とし、「うつ」と声を上げて身体の動きを止めた。

そういえばボールをとって顔を見せるのは、ここに来てからは初めてだ。結婚式から今まで、ずっと顔を見せていなかった。

「あの、アリーチェです。よろしくお願いします」

とにかく微笑みながら挨拶をする。彼は動かないまま「まさか、これほど似ているとは……」と呟く。声が震えているけれど、大丈夫だろうか。

しばらくしてコホンと軽く咳をした彼は、書類を拾い上げると仕切り直すように硬い声を出した。「とりあえずアリーチェ殿、悪いがそこに座ってくれ」

「はい」

寝室には応接用のソファアが置かれている。とうとう初夜を迎えることになり、私は高鳴る鼓動を感じつつ腰を下ろした。

「あの……ルドヴィーク様、私もお話ししたいことがあります」

「そうか、俺も確認したいことがある。酒に酔われると困ると思い、すぐに宴席を抜けてきたが、もし酔いたいのであれば、明日からにしてくれ」

「はあ。あの、お酒は別にいいのですが……確認とは？」

私は首を傾げてルドヴィーク様を見た。相変わらず顔は黒い靄もやに囲まれていて表情がわからない。けれど向かい側に座る彼は特に不機嫌にはなっていないようだ。

「ところで結婚に関する契約書は読んでくれたのか？」

「はい？ 契約書ですか？ 見ていませんが」

素直に読んでいないことを伝えると、ルドヴィーク様は額を押さえて、はあーつと長いため息を吐く。どうやら、結婚前に読んでいなかったものらしい。

「ダイヤモンド……わざとだな。まあ、仕方がない。この書類を見てほしい。これは俺たちの利益のために最善となるよう、考えた契約だ」

「……はい？」

彼は白っぽい紙の束を低いテーブルの上に広げる。そこには結婚に際しての契約事項がびっしりと書かれていた。

「かいつまんで話すと、君には辺境伯夫人としてお飾りの妻になってほしい。俺が君を愛することはないし、君が俺を愛する必要もない」

「……はあ」

「愛人をつくるのは自由だが、できれば大っぴらにしないでほしい。子どもが欲しければ、親族の男性を紹介する。君が選んだ者と交わり、男児を産んだ後であれば自由にしてもらっても構わない」

「……はあ」

「それから、今夜は一刻以上はこの部屋で俺と同じ寝台で寝てほしいが、ふりだけで構わない。同衾どうきんすることは期待しないでくれ。しばらくしたら城に帰るから、君はここで寝てくれればいい」

「……はあ」

思いがけない言葉が飛び出してきて、混乱してしまう。どうしてルドヴィーク様がこんなことを言い出したのか、理解できない。

もしや私が淫乱な女性で、男性であれば誰とでも寝ると思っているのだろうか。そんなのは誤解だから、話を聞いてほしいけれど……

——あ！もしかして、この黒い靄もやのせいなのかも！

これほどの靄もやに包まれていては、正常な思考ができないのだろう。だから私が淫乱だと思い込んでしまったに違いない。

ふんふんとルドヴィーク様の説明を一通り聞き、契約書にサインをする前にと私は口を開く。

「ルドヴィーク様、契約の前に私の方からもよろしいでしょうか」

「あ、ああ。なんだ、話があると言っていたが」

コホン、と咳払いをした私は、スカートの裾を持つと立ち上がった。そしてスタスタと歩いて彼の座っている後ろに立つ。

「これから私が、ルドヴィーク様の頭部を触ります。少し時間がかかるかもしれませんが……きつと、頭が晴れると思いますので、ジツとしていてくださいね」

「頭が晴れる？」

「はい、スッキリすると思います！」

こうしたことはくどくどと説明するよりも、体験してもらった方が早い。私は両手をかざすと、黒いもやもやを払うようにして頭に触れた。

——うわっ、これ、凄くこびりついている！

普段であれば、触れるだけで消える霧が簡単には消えそうにない。けれど根気良く払っていけば、綺麗になると確信していた。

「ちよつと痛いかもしれませんが、我慢してくださいね」

「なに？」

払うだけでは難しいと、私はルドヴィーク様の肩をパシンと叩いた。すると霧がスツと消えていく。二度、三度と続けていくうちに、肩が軽くなっていくのを感じたのか、彼が声をかけてくる。

「これは……私の肩に何かついているのか？」

「肩というか……ちよつと待つてください」

パシン、パシンと叩くと埃が上がるように霧が上がってくる。けれど、なかなか全部は払いきれない。

こんなことは初めてで、焦り始めた私は彼の全身を観察する。よく見ると、霧は上半身よりも下

半身にこびりついている方が少しだけ薄い。

「あの……すみませんが、寝台に横になつてもらえますか？」

「寝台に？」

「はい、その方が全身スッキリすると思います」

これまでにない量の霧を払っているせいか、さすがの私も息が切れてくる。こうなったら先に下半身の霧を取つてしまおうと、ルドヴィーク様を寝台に寝かせた。

——うわあ、これは……この場所、払つてもいいかなあ……でも結婚したんだから、いいよね……

黒い霧は下半身の股間部分に集中している。戸惑いを感じるけれど、ここを払わないことにはスッキリしない。

私はいつもみたいに手で霧を払うようにして、下半身に触れる。どうしても避けきれないが、仕方がない。なるべくアレに触れないようにしながらも、黒い霧を払っていく。

しばらくすると、根つこの部分にあたる霧が見えてきたので、それを掴んで引っこ抜くことにした。「ちよつと動かないでいてくださいね」

「あ、ああ……」

まるで股間を掴むように手で触れると、流石にびつくりしたのかルドヴィーク様の身体がビクンと震える。そのまま根つこを掴んだ私は、「えいつ」と掛け声と共にそれを引き抜いた。

「できたっ！」

掴んでいた霧の根っこが、手の中でさらさらと消えていく。どうやらルドヴィーク様の身体を離

れたことで、力を失ったようだ。けれど、力を使い果たしたのか私の身体に限界がきてしまう。

「はあ……はあ……あの、すみません」

「どうした？」

「ちよつと……眠気が……きてしまつて」

「なに？」

「おやすみなさい」

下半身の呪いを消した途端、急激に眠くなる。まだ何も説明していないのに、私は倒れ込むようにして横になった。

これまでにないほど不思議な力を使つたため、眠気に抗うことができなくなり、ルドヴィーク様の隣で横になるとすやすやと寝息を立ててしまう。

その時、隣にいたルドヴィーク様の下半身に予想もしなかった事態が起こり、彼は衝撃に襲われていた。そんなことなどつゆ知らず、私は健やかな寝顔を見せるのだった。

◆第二章

《Side ルドヴィーク》

その時、俺の身体に奇跡が起こった。

「勃った……！」

まさか、俺の息子が勃起するとは思ひもしなかった。結婚初夜だからだろうか。妻となったアリーチェが、初恋の彼女に似ているからだろうか。驚きつつも彼女から目が離せない。

白い肌はみずみずしく艶やかだ。触れたら壊れそうなほど小さいのに、胸の谷間はくつきりとしている。触りたい。

だが……！ 男として、騎士としての矜持がそれを許さない。

もんもんとしながら俺は、この結婚に至るまでのことを思い出していた。

あれは、三月ほど前のことだった――

「ルドヴィーク様、先方から返答が届きました」

「うむ……で、今度はなんと断つてきた？」

「いえ、了解とのことでございます」

「なに、本当か？」

質実剛健を形にしたような質素な執務室で、俺は筆頭執事であるデモンドから手紙を受け取った。

「もちろんでございます。伝統と格式のあるこのバルシュ辺境伯からの申し出を断れる者など、このシャリアード王国には王家の他は存在しておりません。もしいれば、この私が表に立って槍を持ち」
「あー、わかった。わかったから落ち着いてくれ」